

平成30年度 幼児教育学科

自己点検・評価報告書

平成 31 年 3 月
富山短期大学 幼児教育学科

目 次

概 要
1. 教務
2. 保育実習・教育実習
① 保育実習Ⅰ－1
② 保育実習Ⅰ－2
③ 保育実習指導Ⅰ
④ 保育実習Ⅱ・保育実習指導Ⅱ
⑤ 保育実習Ⅲ・保育実習指導Ⅲ
⑥ 教育実習Ⅰ
⑦ 教育実習Ⅱ
⑧ 教育実習指導
⑨ 富山県保育実習連絡協議会
⑩ 自主実習
3. 総合演習
4. 保育・教職実践演習
指針Ⅱ 学生支援	
1. 学生指導
2. 進路支援
指針Ⅲ 地域貢献	
1. ボランティア・地域活動
2. 幼児教育センター活動

1 概要

担当 [学科長 高木]

1. 平成 30 年度自己点検・評価項目およびメンバー

自己点検・評価項目	メンバー
I 教育	
1 教務	
2 保育実習・教育実習	高木 三郎 望月 健一 石動 瑞代
3 総合演習	梅本 恵 中山 里美 難波 純子
4 保育・教職実践演習	山川賀世子 大森 宏一 松居紀久子
II 学生支援	明柴 聡史
1 学生指導	
2 進路支援	
III 地域貢献	
1 ボランティア・地域活動	
2 幼児教育センター活動	
3 研究・社会的活動・所属団体研 等	
IV 入学者確保	
1 学生募集・入学試験	
2 広報活動	
V マネージメント体制	
1 予算	

2. 平成 30 年度自己点検・評価の概要

本学科では平成 12 年度から毎年、活動全般について、学科教員全員による自己点検・評価を実施している。本報告書は、それぞれの項目について科内分掌上の担当者を中心に整理した実績と問題点を科内会議で協議し、現状を総括するとともに、次年度に向けての課題とさらなる改善・向上のための行動について検討した結果を取りまとめたものである。

平成 27 年度からは、アクション・プランの点検を踏まえ、その項立てに基づいて報告することとしている。

その概要は、次に示すとおりである。

I 教育

(1) 教務

平成 30 年度は、全学的には、国の大学教育再生加速プログラム（AP）に採択を受けて 5 年目に入り、成果をまとめる時期であった。その成果は、「2018 年度 教育課程改善レポート」にまとめられたが、本学科においても、授業アンケートの分析をおしてこれまでの教育成果と今後の課題をまとめた。今後も、Web シラバスの総合的な活用や、諸アンケートの有効な活用について教員間の理解を深め、学修成果の向上につながるように授業内容・方法の改善を図っていく必要がある。

また本年度は、半世紀ぶりと言われた教職課程の再課程認定、及び指定保育士養成施設指定基準の見直しに伴い、来年度以降の教育課程を大幅に変更するための申請手

続きを行った。どちらも無事に認定を受けることができた。この機会に、教職課程に関する履修細則と保育士養成課程に関する履修細則を作成した。来年度からは、新しい教育課程の効果について検証していくことが求められる。

また、1年前期の「基礎演習」15回のうち3回で、専任教員全員によるゼミ形式の授業を実施した。学生からも教員からも好意的な意見が聞かれた。実施のフィードバックを科内会議で行い、その成果・課題を「授業改善事例集」にまとめた。

(2) 保育実習・教育実習

実習指導科目（保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱ・Ⅲ、教育実習Ⅰ、教育実習Ⅱ）間の授業内容調整と担当者の協働により、事前・事後指導の充実を図った。教育実習Ⅰについては、実習先である付属幼稚園が園舎改築工事中だったが、実習日の時間を区切って講義と実習を組み合わせることで対応した。結果として、きめ細かい指導ができた。今後の課題としては、保育実習Ⅰ－1と教育実習Ⅱの事前指導をより効果あるものとするため、日程を見直す必要がある。「保育実習評価表」についても、現場保育士と意見交換を行った結果、改善の余地があることが分かった。なお、幼保連携型認定こども園の増加に伴い、教育実習先の確保が難しくなりつつある。保育所から幼保連携型こども園に移行した施設も含め、実習に適格な園の見極めや配置先を早期に確保することが求められる。

(3) 保育・教職実践演習

保育実践力向上につながる内容を「遊びの広場」実践活動として展開することができた。昨年度は3グループ編成だったが、今年度は4グループ編成とした。1グループの人数を減らすことで個々の主体的な取組を促がした。

また、講義内容のまとめや演習課題の討議・発表を通して、4つの資質能力の理解は図られているものの、全体として「自己課題の発見」へのつながりは不十分である。

Ⅱ 学生支援

(1) 学生指導

学業不振の学生、健康面や心の問題を抱えている学生について定期科内会議において情報を共有しているが、今後さらにそのような学生に対しては、科内職員及び保健室やカウンセラーなどと連携して指導に当たる必要がある。

多様な学生たちが入学している。学科外との連絡体制も密にし、早期の個別指導・援助や保護者懇談が必要である。

(2) 進路支援

平成30年度卒業生の就職決定率は100%で、専門職就職率も100%であった。卒業生全員が、保育士資格と幼稚園教諭免許の両方を取得した。また、今年度より、社会福祉主事任用資格を取得できるようにした結果、ほぼ全員が社会福祉主事任用資格単位取得証明書の交付を申請した。

保育士不足を反映して、求人が過熱化している。就職先の見極めについて指導していく必要がある。公務員（市町村保育士）採用試験には18名が合格した。筆記試験（教養・専門）や作文・面接試験対策の充実・強化をさらに図るとともに、学習意欲や習慣を持たせる環境や集団づくりの工夫が必要である。

Ⅲ 地域貢献

(1) ボランティア・地域活動

今年度も例年通り、数多くの参加が見られた。新しい内容として、南砺市の地域連携センターにおける学園祭に本学科の学生 10 余名がボランティアとして参加し、イベントを盛り上げた。

(2) 幼児教育センター活動

今年度も幼児教育研究会を開催し、県内外の幼稚園・保育所等の関係者と保育者養成校の教員、学生が一堂に会し、研究と実践を交流・推進する場とした。今後も、より充実・発展させることが求められる。今後は、機関紙「越の子」における発信内容の検討が必要だと考えている。

(3) 研究・社会的活動・所属団体研修等

入試業務や学生指導業務などの増大に伴い、教員の研究時間の十分な確保は難しくなっている。学科業務を見直し、効率化を図ることが必要である。

個人研究の推進とともに、学科共通の共同研究への取組みの活性化が必要である。また地域と連携した研究活動についても、教員個人の活動に限定せず、可能なものは学科としての組織的な取組みに発展させることが求められる。

今年度、大学コンソーシアム富山の「学生による地域フィールドワーク研究成果発表会」において、学科教員と 17 名の学生が成果を発表し、最優秀賞を受賞した。今後も、学生の主体的研究をサポート。

Ⅳ 入学者確保

(1) 学生募集・入学試験

平成 31 年度入試の総志願者数は 157 名と、昨年度に比し 13 名の増であった。これまで数年にわたって減少傾向が続いていたが、歯止めがかかったと思われる。国による保育士処遇の改善策も影響しているものと思われる。しかし、4 年制大学への志向が強まっている。本学科を第一希望として入学するような魅力づくり、働きかけが必要である。今年度は、指定校枠を大幅に見直した。また、来年度から自己推薦入試を導入することにした。今後は、より一層多様な学生が入学することが予想される。志願者を増やし可能な限り資質の高い学生を確保することに加え、入学後の教育・指導のより一層の充実が求められる。

(2) 広報活動

今年度は、64 件（H29：51 件、H28:53 件、H27：52 件、H26：49 件）の記事をトミタン・ブログに公開し、過去最高の件数となった。今年度は特に、授業紹介やステージ発表などの記事を数多く公開し、高校生が本学へ入学後の学生生活や授業風景をイメージしやすいよう、“Tomitan 幼教で学ぶイキイキした学生の姿”を積極的に伝えた。

1. 現状

(1) 平成30年度の課題への取り組みについて

① Web シラバス機能を活用した授業改善への取り組み

今年度も10月、11月のFD研修会において全学科の授業改善事例報告が行われた。「授業改善事例集」には、各学科のFD研修会における発表内容をPart Iに、学科の授業改善への取組みをPart IIに掲載した。

本学科では、「保育内容（造形表現）」の担当教員がFD研修会で発表を行い、その発表を基に作成した原稿を「授業改善事例集」Part Iに掲載した。また、「基礎演習」における授業改善への取組みをまとめた原稿をPart IIに収録した。

② 地域課題の理解や解決に向けた取り組み

今年度は、「総合演習」のいくつかのゼミにおいて地域の課題に関わるテーマによる研究を行った。園舎の引っ越しが子どもに及ぼす影響、乳児保育における担当制、子どもの健康観察に関する父母の差、保護者の児童虐待への理解、児童養護施設で働く保育者の専門性等がテーマとして取り上げられた。

また、今年度より「地域課題解決型人材育成プログラム」が発足した。本学科では、以下の7科目11単位より8単位以上単位を取得した学生に「未来の地域リーダー」の称号を与えることにした。

地域志向科目群：「現代社会と人間」

地域課題解決科目群：「保育・教職実践演習」「総合演習」「相談援助」「保育相談支援」

地域関連科目群：「保育者論」「児童社会」

この他、今年度2月に大学コンソーシアム富山の「学生による地域フィールドワーク研究成果発表会」において学科教員と17名の学生が「障害児（者）施設で働く保育士の専門性についての研究」の成果を発表し、最優秀賞を受賞した。

③ 学生への情報提供と履修内容に関する意識の向上

履修登録時や履修カルテ作成などの機会を有効に利用し、学生の履修内容への意識を高め、自ら学ぶ姿勢を醸成していくことに取り組んだ。少しずつ意識の高まりは見られるものの、一部の学生に「保育実習Ⅱ・Ⅲ」、「国際情勢」「生活と科学」等、2年次選択科目の履修登録のミスが見られた。また、履修カルテの記入が不十分なものも散見されるなど、さらなる取組みが必要である。

④ 学習環境の保障

今年度は、2階事務室で管理していたノートパソコンのうちの6台を5階ラウンジに設置し、「総合演習」の文献調査、原稿作成、授業アンケート回答等で学生が自由に活用することができるように配慮した。

平成17年度より座席表を作成しているが、今年度も年間4回の座席替えを実施した。出席番号を基本に作成しているが、座席替えの際に3組と4組の列を左右入れ替える、1クラスをさらに2グループに分けて行う授業で奇数番号と偶数番号のグループを作る等の工夫を行った。しかし、一部の学生から座席替えをしてもあまり変化がないと

の不満の声も聞かれた。

来年度は、1年前期のみクラス別とし、その後は両クラスの学生の座席を出席番号順ではなく無作為に配置する等、学習環境に変化を持たせるようにしていきたい。

⑤ クラス担任制の見直し

学科教員より、クラス担任の負担が大きいためゼミ担任制の導入も含めた検討をしてほしいとの提案があり、科内会議において時間をかけて協議を行った。その結果、以下の結論を得た。

- ・ 現行カリキュラムでは、1年後期にゼミがないため、ゼミ担任制導入は難しい。
- ・ 生徒ではなく、学生としての自覚を持たせることが大切である。また、高校時代までの担任のイメージを払拭するため、クラス担任をアドバイザーと呼ぶことにする。
- ・ 2年次においては、履歴書添削等、就職指導の一部を「総合演習」担当教員が行う。
- ・ 学生の自治能力を高めるため、2年生と1年生の交流の持ち方を見直し改善していく。

⑥ 休学、退学、留年について

平成30年度は、進路変更のため1名の学生が1年次2月に退学した。また、1名の学生が今年度9月から来年度9月まで休学の予定である。これらの学生に対しては、担任を中心に個別相談や指導、保護者面談等、きめ細かな対応を行った。

(2) 現任教育への対応

平成30年度の「教員免許更新講習」では、「選択科目」(3講座18時間)を開講した。実施日は、8月4日(土)、9月1日(土)、9月8日(土)の3日間、受講者数はそれぞれ96名、111名、95名であった。

また、富山国際大学子ども育成学部と共同で「幼稚園教諭免許状特例講座」を開催した。期間は6月30日(土)～12月16日(日)の土・日曜日、計16日間で、39名の受講者が参加した。

(3) 教育課程懇談会の実施

① 2年生と教員による教育課程等懇談会

2年間の学びを通して感じた率直な意見を学生から聞くことを目的に、1月9日(水)に「2年生と教員による教育課程等懇談会」を実施した。今年度は第16回目にあたり、2年生22名、学科教員9名の計31名で、教育課程、実習、学習環境、学生生活等について懇談した。

② 教育課程懇談会

隔年で実施しているが、今年度は2月27日(水)に実施した。非常勤講師4名、学科教員7名の計11名で、教育課程、学生の学習に対する取り組み、学生指導のあり方等について懇談した。

(4) 学生間の交流支援(学生相互の学習体験や実習体験の交流)

今年度も、昨年度に引き続き、学習や実習の体験を語り合う交流支援を行った。

① 学外研修での1・2年生の「交流会」の実施。

- ② HR等の機会を利用した、2年生から1年生への「実習連絡・報告会」の実施。
- ③ 講義を利用した交流支援（「保育者論」（2年）で1年生向け「実習ハンドブック」を作成・配付。「保育の心理学Ⅱ」（1年）「保育者論」（2年）の合同授業で、2年生が取り組んだ「ロールプレイング」を実施）。
- ④ 「総合演習発表会」「卒業演奏会」への1年生の参加。
- ⑤ 「保育・教職実践演習」における「遊びの広場」の取り組み。

（5）科目横断的授業実施の取り組み

昨年度に引き続き、「音楽Ⅱ-2（オペレッタ）」「保育内容（言葉Ⅱ）」「図画工作Ⅱ-2」（2年）の協働によりオペレッタの制作・公演活動に取り組んだ。

その他、実習指導や保育内容の表現系科目においても科目横断的な授業を実施し、教育効果や教員間の協働性を高める取り組みを行った。

（6）基礎演習科目

教養科目「基礎演習」（1年前期）を開講して4年目にはいる。今年度は、主務担当者が中心となって計画を立案し、全15回のうち3回を専任教員全員で担当するゼミ形式の授業とした。ゼミ形式の授業内容は、野鳥観察レポート、絵本の紹介、自由な研究テーマによる発表で、学生によるピア・レビューも参考にして各教員が成績評価を行った。ゼミ形式を採り入れたことについては、学生からも教員からも好意的な意見が聞かれた。また、授業実施後のフィードバックを科内会議で行い、その成果・課題を「授業改善事例集」の各学科の取り組みとしてまとめた。

（7）読書活動の推進

今年度も授業の中で利用を促したり、実習の際に絵本を携行するよう呼びかけたりしたが、附属図書館の貸し出し冊数は昨年度に比べ、やや減少した。学年別に見ると、1年生約540冊、2年生約270冊と、昨年度と同様、2年生よりも1年生の方が貸し出し冊数が多くなっている。

授業と連携した図書館の活用としては、「基礎演習」で3回、「総合演習」の一部の研究分野で2回、外部データベース講習会を実施した。

（8）附属幼稚園との連携

昨年度より、学科教員が園長を兼務し、連携をとりやすい体制が整えられている。今年度も学生の実習評価を中心に、幼稚園実習のあり方、位置づけ等について附属幼稚園教員との協議を行った。また、「保育・教職実践演習」で附属幼稚園の子どもと保護者を対象に「遊びの広場」の活動を行った。

（9）実践的社会力を身につけるための体験講座

1、2年生に「緊急救命講習」を受講させた結果、ほとんどの学生が「普通救命Ⅲ」の資格を取得した。また、2年生を対象に「ゲートキーパー講習会」を実施した。

（10）平成31年度からの新カリキュラム発足に向けて

今年度は、まず5月の学外研修時に、全員参加で新カリキュラムにおける授業科目の関連性について共通理解を図った。これを踏まえて、「3つのポリシー」及びWebシラバスの「授業科目系統図」の改定を行った。また、保育士課程の講義概要、保育士課程履修細則、教職課程履修細則を作成、「大学コンソーシアム富山単位互換科目」

「地域課題解決型人材育成プログラム」「富山国際大学との単位互換科目」の見直しを行った。

新カリキュラム発足に向けて今後の「アクションプラン」の検討課題の一つとして授業における「ICT技術の習得」を設定した。また、教職課程コアカリキュラム「保育内容の指導法」の授業科目において「教材及び情報機器の活用方法の指導」をどのように行うか、科内会議において意見交換を行った。

(11) 社会福祉主事任用資格取得への対応

今年度より社会福祉主事任用資格を取得できるようにした。資格取得に必要な授業科目は、「保育原理」「教育原理」「子ども家庭福祉」「社会福祉」である。来年度「教育課程表」の「資格取得に必要な単位数」に新たな欄を設け、カレッジガイド、短大ホームページでも明記するようにした。

(12) 平成 30 年度教務委員業務報告

年度始めに「教育課程業務分担表」を作成し、それに基づいてすべての業務を行った。

(13) 「自己点検表」による学科の自己点検について

厚生労働省東海北陸地方厚生局が、「養成施設等の適正な運営」のために作成している「自己点検表」に基づき、自己点検を行った。

2. 課題

(1) 教員間の情報共有のあり方について

学科の教務に関する様々な情報については、教員間が情報を共有し、必要な時にすぐ閲覧・利用できることが望ましい。現在、業務担当者のみが保存しているデータを教員間で共有するためのシステム構築が求められる。同時に、データ共有のリスクを鑑み、必要な利用ルール等を設定することが必要である。

サイボウズが導入されたことにより学内の行事日程を確認できるようになったが、うまく活用されていない。また、学生指導のための情報を共有のようにしたい。

(2) 学生への情報提供と履修に対する意識の向上

今年度は、4月のオリエンテーション期間中に授業科目の履修、履修登録方法等、あらかじめ説明担当者を決めた上で、学科オリエンテーションを実施した。しかし、本学科では、後期は両学年ともオリエンテーションと実習の日程が重なるため、このようなかたちでのオリエンテーションの実施は不可能である。今年度も、履修登録において特に2年次において授業科目の登録漏れや登録ミスがいくつか見られた。学生に対して注意を喚起する必要がある。

(3) 協働作業やグループ討議等による授業の実践

既に半数以上の授業において、協働作業やグループ討議等を採用している。今後、「授業改善報告書」でも順次採り上げていきたい。

(4) 地域課題の理解や解決に向けた取り組み

今年度は、「総合演習」のいくつかのゼミにおいて地域をテーマとする研究の指導を行った。また、大学コンソーシアム富山の「学生による地域フィールドワーク研究成果発表会」において学科教員と学生が研究成果を発表した。来年度以降も、富山県

内の保育現場の様々な取り組みや歴史についての研究の指導を一層充実させていきたい。

(5) GPA の活用

年度は、教務委員会において GPA 活用に関する全学共通の「成績評価に基づく学修指導・支援について」を作成、次年度から「学生生活のしおり」に掲載する予定である。

本学科では、新入生を対象に4月の学科オリエンテーションで GPA に関する説明を行う他、学外における実習への参加要件の一つとして活用している。また、特に指導の必要な学生に対しては、担任・本人・保護者の三者面談において、改めて GPA の説明を行っている。その他の活用方法についても、今後検討していきたい。

(6) 履修カルテ、実習評価表等と DP の関連性の検討

履修カルテ、実習評価表について内容を検討したが、DP との関連性にまで至っていない。保育実習評価表について見直しを図り、「保育実習懇談会」の場で、保育現場の保育士等と意見交換を行った。その結果、保育現場職員の記入のし易さという点で課題があることが確認された。

(7) プレゼンテーションスタジオを利用した社会活動

今年度は、2年生の「保育・教職実践演習」での「遊びの広場」実践活動、卒業演奏会等でプレゼンテーションスタジオを使用した。その他の活用方法についても、今後検討していきたい。

(8) 富山国際大学との連携・連絡を緊密化

学部・学科の行事、授業等のための教室使用に関しては、富山国際大学子ども育成学部と事前に連絡を取り合い、不都合が生じないように配慮している。来年度も一層連絡を密にとるように努めたい。

また、富山国際大学主催による特別講義「幼児教育の今後」（無藤隆白梅学園大学特任教授）を2年生が授業の一環として聴講し、ともに学ぶ機会をつくった。

(9) 教育実践に関する共同研究の推進

平成27年度より、音楽と造形の分野のコラボレーション授業の協同研究を継続している。来年度に向けて他の授業に関しても共同研究が可能かどうか、検討していきたい。

(10) 特色ある保育者養成課程の検討

富山国際大学子ども育成学部との関係も考慮にいれながら、「感性」「表現」といったキーワードを軸に、具体的な特色づくりと養成課程への体系化に取り組んでいる。これらの特徴を新しい教育課程の中でどのように生かしていくかが今後の課題である。

(11) 平成31年度からの新カリキュラム発足に向けて

既に作成した教職課程再課程認定のためのシラバス、保育士養成課程用の講義概要を基に、各教員がより詳細な Web シラバスを作成し、綿密な計画のもとに授業を進めていきたい。また、オムニバス形式による「子どもと遊び」等、新カリキュラム2年次開講科目に関しては、具体的な授業実施方法等について、さらに協議を重ねていくことが必要である。

(12) 授業における ICT 技術習得の推進

保育現場における ICT 技術の導入を踏まえて、「コミュニケーションと情報」「基礎演習」「教育方法論」「保育内容の指導法」等の科目においてパソコン技術の習得を推進していくことが必要である。

(13) 「基礎演習」のさらなる充実・改善

今年度は、全 15 回のうち 3 回の授業で学科教員全員が関わる時間を設け、ゼミ形式で授業を実施した。来年度は、発表内容・方法を再検討し、さらに学生の主体的な学びを推進できるように工夫を重ねていきたい。

(14) 視野を広げるための教養教育の充実

来年度は、新たに大学コンソーシアム科目「人生 100 年時代論」「とやまの食文化」が開講される。授業の運営・実施に全力で取り組みたい。また、「現代社会と人間」と併せて履修者の獲得に努めたい。

(15) 基礎学力不足の学生に対する取組みの強化

外部における実習時まで基礎学力や事前準備が整っていない学生を把握し、必要に応じて個別指導を実施していきたい。

〔別記〕平成 30 年度学生在籍状況（平成 31 年 3 月現在）

1 年 在籍 86 名

2 年 在籍 81 名

3. アクションプランとの関連

【指針 1：教育】 1-(3)-③ 附属幼稚園との連携を強化

「1. 現状 (8)」で述べた通り、附属幼稚園教員との協議を行った。また、「保育・教職実践演習」で「遊びの広場」の活動を行った。

【指針 1：教育】 1-(4)-① 教養・知性、課題解決のための読書活動、情報収集活動

「1. 現状 (7)」で述べた通り、今年度も授業や実習で図書貸し出しを促した。また、一部の授業で外部データベース講習会を実施し、図書館との連携を図った。

【指針 1：教育】 1-(4)-② 科目協働による総合的な授業の実施

「1. 現状 (5)」で述べた通り、今年度も「音楽Ⅱ-2（オペレッタ）」「保育内容（言葉Ⅱ）」「図画工作Ⅱ-2」の協働によりオペレッタの制作・公演活動に取り組んだ。

【指針 1：教育】 1-(4)-④ プレゼンテーションスタジオを利用した社会活動を検討

「2. 課題 (7)」で述べた通り、「保育・教職実践演習」での「遊びの広場」実践活動、卒業演奏会等でプレゼンテーションスタジオを利用した。

【指針 1：教育】 2-(5)-① 協働作業やグループ討議等による授業の実践

（【指針 1：教育】 4-(12)-①再掲）

「1. 現状 (4)」で述べた通り、学習や実習の体験を語り合う交流支援を行った。また、「2. 課題 (3)」で述べた通り、半数以上の授業において協働作業やグループ討議等を取り入れている。

【指針 1：教育】 2-(5)-② 地域課題の理解や解決に向けた取り組み

（【指針 1：教育】 3-(8)-①、【指針 1：教育】 4-(12)-②再掲）

「1. 現状 (1) ②」で述べた通り、「総合演習」の一部で、地域志向の課題に関わる研究を行った。

【指針 1：教育】 2-(6)-① 基礎演習科目の開設

「1. 現状 (6)」で述べた通り、今年度は、「基礎演習」において、学科の専任教員全員で授業を担当し、一部少人数によるゼミ形式の授業を採り入れた。

【指針 1：教育】 2-(6)-① GPA の活用

「2. 課題 (5)」で述べた通り、GPA を学外における実習への参加要件の一つとしている他、学生の個別指導の材料としても活用している。

【指針 1：教育】 2-(7)-① 子ども育成学部との連携・連絡を緊密化

「2. 課題 (8)」で述べた通り、教室使用に関して富山国際大学子ども育成学部と事前に連絡を取り合い、不都合が生じないように配慮した。

【指針 1：教育】 2-(7)-② 貸し出し用 PC、プリンターの適正な取り扱いを徹底

「1. 現状 (1) ④」で述べた通り、E館5階ラウンジにパソコンを増設し、「総合演習」、授業アンケート回答等で学生が自由に活用できるように配慮した。

【指針 1：教育】 3-(10)-① 産官学協働プログラムの実施

「1. 現状 (9)」で述べた通り、「救急救命講習」「ゲートキーパー講習会」を実施した。

【指針 3：地域貢献】 2-(6)-① 保育者の現任教育に参加

「1. 現状 (2)」で述べた通り、「教員免許更新講習」「幼稚園教諭免許状特例講座」を実施した。

1. 現状

(1) 実習計画と履修状況

保育士資格取得希望者の必修選択科目として、1年生 86 名が履修した（1名は新潟県で実習）。

(2) 麻疹等小児期ウイルス感染症への対応等について

入学時健康診断による「麻疹抗体価測定血液検査結果票（写し）」を、富山市及び高岡市で実習を行う学生に持参させた。また、富山市からは今年度より健康診断書の提出が求められるようになった。

(3) 特別講義を通じた学び

例年通り、富山市立保育所所長による特別講義を実施した。保育実習 I - 1 で対象となる乳児の発達特性について理解を深めると共に、未満児保育の概要と実習生としての基本姿勢について学んだ。

(4) 実習懇談会の開催

2018年12月5日(水)、本学にて保育実習 I - 1 実習懇談会を開催した。10か所の保育園・こども園からの参加があり、実習生の状況や実習の在り方に関して忌憚のない意見交換が行われた。「実習評価表」については、所見の記述欄があることで評価段階だけでは表しにくい内容が反映できるという現場の意見が聞かれた。

2. 課題

(1) 実習中の体調等管理について

体調不良による欠席が例年に比べて多く（15名、のべ22日）、後日追加日程で実習を行った。実習前の体調管理についてさらなる指導が必要である。

(2) 実習評価表の検討

実習園によっては、保育士としてのあるべき姿から厳しい評価をされることもしばしばある。実習評価はあくまで実習生としての評価であることを明記するとともに、評価の観点の検討を行いたい。

(3) 実習事前指導について

保育実習 I - 1 では実習先によっては部分担任が求められる。意欲的に部分担任に取り組めるような事前の指導が必要である。引き続き、他の授業と連携して教材研究・教材の準備を行いたい。また、個別指導担当教員とも連携しながら、事前訪問レポートへの「準備した教材」の記入、教材が活用できたかの振り返りも指導していきたい。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針1：教育】1-(3)-② 保育実習懇談会を開催し指導体制の改善を図るとともに、実習担当教員、実習個別指導担当教員、担任等との連携を図り、個々の学生の実習指導に対応した。県外出身者について全員の訪問指導を行った。

1. 現状

(1) 実習の現状

1 学年 86 名の学生が第 1 班 (23 施設 56 名) 第 2 班 (14 施設 30 名) に分かれて実習を行った。施設数について 30 年度は、3 か所の新規施設を増やして実施した。一部の施設でインフルエンザの流行から実習時期の変更があった。

(2) 2 年生からのガイダンス

平成 31 年 1 月 16 日 (水) 5 限目に事前指導の一環として、2 年生からの施設実習ガイダンスを、配属別を実施した。学生は、自分の受け入れ施設の利用者の様子や実習生への指導のこと、また施設内での実習の留意点など具体的に聞くことで施設実習に対する理解を深めていた。このガイダンスにより施設実習への不安の軽減とともに実習に対する意欲を高めるきっかけとなった。

(3) 関連科目との連携と情報機器の使用の推進

社会的養護内容、子どもの保健などの学習科目の内容を繋げて、学びに生かされる実習となるように位置付けて取り組みを進めた。また、事前レポート課題を実習計画書に変更し、パソコン入力を推進して行った。約 6 割程度の学生がパソコンにて入力し提出ができた。

(4) 障害者及び施設に対する不安への対応

障害者との関係や施設的环境などへの不安が大きい学生がいた。実習時の対応方法などの相談に応じながら指導した。

2. 課題

(1) 実習施設の確保

宿泊を伴う施設が減り、実習への配属が困難になってきている。ただし学生は宿泊実習を嫌う傾向である。通いの実習においては、公共交通機関で通うことは難しい状況がある。特に冬季の実習のため施設までの交通には危険や安全面で不安がある。また疾病や感染症においても予防対策を徹底していきたい。同時期に富山大学と実習が重なることから富山大学との調整にも時間と労力を要する。そして、県外出身学生の施設先確保についても今後は、種別の確認や訪問指導の点からなるべく県内施設での実習を進めるべく検討が必要である。

(2) 事前・事後指導

施設ごとに行う 2 年生からのガイダンスは、細かい注意事項や配慮が丁寧に伝えられていて効果的であった。施設の現場担当講師からの特別講義は、施設における保育士の役割の理解や利用者への援助方法など視覚教材を用いて説明を受けることにより具体的で理解しやすかった。また、事前・事後指導の充実を図るとともに、今後さらに社会的養護内容、子どもの保健などの学習科目の内容を繋げて、学びに生かされる実習となるように位置付けて取り組みを進め必要がある。障害者施設での実習における不安を軽減するためにも、1 年前期に行っている見学実習の施設について、障害者施設を入れることを検討する必要がある。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針 1:教育】 1-(3)-②実習指導の体制を点検・強化

保育実習指導 I (保育所関連)、教育実習 I の担当者 と連携を図り、実習の基礎的事項が確実に定着するような指導内容としていきたい。

1. 現状

(1) 指導内容の充実

特別講義や施設見学を通して、現場の先生方から学ぶ機会を設けたり、グループで課題に取り組むなど、実習に必要な知識を多様な方法で学ぶことができた。保育実習 I-1 は、関連教科及び教育実習 I と連携して教材研究についても授業を通じて指導し、教材を使った実践の実施報告書を書くように求めた。

(2) 実習中及び事前事後指導

県外の学生を含め学科教員全員で実習中及び事前事後指導が丁寧に行えた。特に、実習の欠席などの問題に対して、担当教員を中心に素早く対応し、実習先と連携をとりながら実習参加を進めることができた。

(3) 実習を通じた学びの継承

事前指導の一環として、2年生が1年生に対して自らの実習体験を通して学んだことを伝え、1年生の疑問・質問にこたえる「実習報告会」を実施した。保育実習 I-1 に向けて、2年生が保育者論の授業で作成した「実習ガイドブック」が1年生に配布され、実習生の視点からの情報が提供された。保育実習 I-2 に向けては、施設ごとにグループを編成して話し合い、1年生にとって初めての施設実習に対する不安感を解消し、意欲をもって実習に臨めるきっかけとなった。

2. 課題

(1) 評価方法の見直し

科目の評価は、保育実習 I-1 事後レポート(40点)、保育実習 I-2 事後レポート(40点)、施設見学レポート(20点)で行っている。授業の実態に合わせ、学修成果がより反映されたものとなるよう評価の方法と配分を見直していきたい。

(2) 指導内容の充実

保育実習 I-1 は、後期授業開始後まもなく始まるため、直前に必要な指導と前期の早い段階から行う指導を再度整理・検討し、学生が余裕をもって実習に備えられるようにしたい。また、実習事前報告・事後報告における指導項目を整理し、実習個別指導担当教員と連携を図りながら指導内容のさらなる充実を図りたい。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針1:教育】1-(3)-② 実習担当教員、実習個別指導担当教員、担任さらには保健室等との連携を図り、個々の学生の実習指導に対応した。

I - 2 - ④ 保育実習Ⅱ・保育実習指導Ⅱ 担当 [中山・梅本]

1. 現状

(1) 実習計画と履修状況、保育実習Ⅱ実習懇談会

保育士資格取得希望者の必修選択科目として、2年生73名が履修した。平成30年6月18日(月)～6月29日(金)、県内67箇所、県外1箇所で72名が実習に参加した。1名は実習期間を8月20日(月)～8月31日(金)に変更して実施した。

(2) 健康診断書の提出

富山市から今年度より、市内の実習先に学生の「健康診断書」提出依頼があった。実習担当教員から保健室に該当者名を連絡し、健康診断書を発行していただき、該当学生が実習先に持参した。

(3) 事前・事後指導と評価

教育実習指導と連続的に取り組む内容として、「保育実習Ⅱの事前学習」「指導案の作成」「教材研究」を行った。担当教員間で指導内容を昨年度の取り組みを元に計画した。「指導案の作成」では、学生からの要望が高かった『全日実習の記入の仕方』を新たに上げた。個別に作成した指導案や教材を発表したり、担当教員による評価やアドバイスしたりする機会を充実させた。事後レポートはタイトルを『教育実習Ⅱに向けて－今後の取り組み－』とし、共通テーマによる作成を試みた。評価では、指導案作成と教材研究・表現技術、事後レポートによる多面的な総合的評価に取り組んだ。

2. 課題

(1) 実習指導における学習内容の改善と充実

保育実習指導と教育実習指導や保育内容(造形表現Ⅱ)の担当者間で共通理解を図り、合同・連携した学習の取り組みにより、指導案の作成力は一定の成果が出てきていると思われる。しかし、集団の前で話したり表現したりする経験が乏しく、苦手意識の強い学生が近年増えてきている。指導計画を実践するにあたり、声や表情、身体の動き等の基本的な課題を克服できてない場合も少なくない。次年度入学生から新しい保育士養成課程が実施される。保育内容の理解と方法として開講される保育内容(健康)指導法、保育内容(言葉)指導法、保育内容(音楽表現)指導法、保育内容(造形表現)指導法等における模擬保育等の実践活動や発表の機会を充実させるため、担当者間で連携し体系的に段階を踏まえた学習が必要だと考えられる。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針1：教育】1-(3)-② 実習指導の体制を点検・強化

実習指導担当者が中心となり、実習先担当者と共に指導体制や実習方法の状況や課題について意見交換し改善を図った。

I-2-⑤ 保育実習Ⅲ・保育実習指導Ⅲ 担当 [明柴・大森]

1. 現状

(1) 実習の状況

今年度の履修者は8名で、児童養護施設2名（ルンビ二園1、高岡愛育園1）、障害者支援施設4名（溪明園2、新生苑1、野積園1）、福祉型児童発達支援センター2名（恵光学園）に分かれて実習を行った。

保育実習Ⅲを履修希望する学生にヒアリングを行い、履修後に想定される課題について説明を行ったほか、個々の希望を丁寧に聞きとった。全体的に施設での就職も視野にいた希望者が多かったが、担当者との面談や受入施設との調整の結果、8名の履修となった。事前・事後学習においては、実習Ⅰ-2での学びの確認や施設種別に応じた研究課題をパワーポイントで作成するなど、少人数ならではの指導に努めた。福祉施設への就職につながった学生は5名であったが、履修したすべての学生が、施設保育士（支援員）としての適性を見きわめるよい機会となった。

2. 課題

(1) 実習施設の選定について

保育実習Ⅱ（保育所）との選択実習であり、履修者数は以下のように推移している。

年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
人数	9名	7名	3名	1名	7名	11名	8名

実習指導の講義やヒアリングの機会を通して、実習Ⅲ選択は就職も視野に入れた選択とするよう指導している。保育所での実習を避けたいという消極的理由で選択することがないようにとの意図だが、実際には徹底できない面がある。今年度は、5/8(人)の6割が福祉施設への就職である。就職を見すえた履修であっても、希望する種別の施設実習を保障できるわけではない。施設保育士としての学びや保育技術の獲得を実習目的とする意識づけが必要である。そのうえで、個々の思いを丁寧にとらえ、適切な実習施設の選択・選定につながるような指導を心がけていきたい。

(2) 事前・事後指導の内容について

実習Ⅰ-2の学びをさらに深化させるための事前・事後指導の充実が必要である。少人数クラスのメリットを生かし、個別指導とグループワーク、課題研究を織り交ぜながら、実習課題への主体的取り組み姿勢を育む指導内容が求められる。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針1：教育】1-(3)-②実習指導の体制を点検・強化

保育実習Ⅲ履修者が、指導案作成や責任実習実施のための演習を受けることができるように、教育実習指導及び保育実習指導Ⅱ（保育所）の担当者と連携を図り、合同講義の実施を行った。今後も各担当者と連携を図り、実習指導内容を充実させていくこととする。

I - 2 - ⑥ 教育実習 I 担当 [難波・山川・松居・石動]

1. 現状

授業計画に沿って実習と事前・事後指導（反省会）等を行った。1年次の前期には前半に観察実習を4サイクル行い、その後、講義と並行して参加実習を行った。9月には、4日間ずつの参加・部分担任実習を行った。

5月の観察実習に入る前に、幼稚園の概要について伝え、本実習の意義について、4月中に説明を行った。また、「実習日誌の書き方」のテキストを用いて基本的な部分について講義を実施した。

入学直後、はじめての実習として園児や実践の場に関わることで、保育者をめざすことへの動機づけにもつながり、本実習は重要な位置づけとなっている。

(1) 観察・参加実習（1年前期前半 5月8日～6月21日）

学生数は88名、配属される保育室は3クラスであった。1クラスにつき学生数14～15名になるようにグループ分けし、観察・参加実習を行った。今年度は、園舎改築工事中で保育室が3クラスと手狭なため、保育室に入る学生数を制限する意味で、実習日の時間を区切って、学内での講義（映像から学ぶ子ども理解：幼稚園での活動のようすの動画）と幼稚園での実習を半分ずつに分けて実施した。

(2) 参加・部分担任実習（1年前期後半 9月4日～9月27日）

参加・部分担任実習に向け、実習内容を考慮した指導案の書き方指導を行った。前年度同様、実習生が園児の前で行う「手遊び」をテーマに設定した。そのため、指導案の書き方指導もそこに照準を合わせて行った。その際、付属幼稚園と協議の上で内容設定を行い、連携して進めることができた。

部分担任実習では1クラスにつき7名～8名配属されるように、学生をグループ分けした。学生は、学内であらかじめ1人1枚ずつ作成した指導案を持って9月の実習に臨んだ。全日程終了後10月1日に、「実習反省会」として、4日間の実践を踏まえた上で、各自の指導案を改めて丁寧に仕上げ、省察した。

(3) 実習評価

前年度より、学内担当教員で見直し学科で協議の上、DPとの整合性を図ったものに変更している。幼稚園実習担当教諭からは、評価しやすくなったと概ね好評である。評価の結果、不可や再実習等はなかった。

2. 課題

実習にふさわしい身なりについて、学内で事前に指導しているものの、なかなか響かない学生もいる。多様な学生に対する指導や、配属クラスによる評価の差異など、実習指導の体制を強化していく必要がある。

3. アクションプランとの関連

【指針I. 教育】1- (3) - ③ 付属幼稚園との連携を強化

学科教員間や付属幼稚園との連携・強化をより一層図り、実習のあり方を検討する。

1. 現状

(1) 実習計画と履修状況

平成30年9月5日(水)～9月26日(水)のうちの10日間で、2年生81名が県内47か所、県外2か所(新潟県1か所、長野県1か所)で実習を行った。なお、園の都合で、上記の期間を超えて計10日間の実習を行った者もいた。

(2) 実習園の調整・確保

毎年、9月に県内の2大学が3週間、本学が2週間の教育実習を行うため、3校で連絡を取り合い、各校で事前に調査した学生の実習先の希望数をもとに、富山県内の公立幼稚園は富山大学で、その他の県内幼稚園は国際大学と富山短大で園に受け入れ可能学生数を1月から2月にかけて伺い、調整を行った。なお、一昨年度から、富山大学が、県内の公立幼稚園全ての受け入れ可能学生数を、各市の代表園に一括して調査することになった。また、実習期間については、多くの園で運動会などの大きな行事と重なっており、実習生の受け入れが困難な時期であることから、来年度も、実習期間を平成31年9月4日(水)～9月25日(水)のうちの10日間とし、園が希望する実習期間で受け入れていただく方法で依頼を行った。

(3) 学生の意欲と学び

2年生の9月は、就職が内定している学生、公務員や民間の採用試験を控えている学生がおり、実習への意欲や準備が十分ではない学生が見られる。また、6月の保育所3歳以上児実習を終えたばかりでもあり、同年齢の子どもを対象とした実習に慣れが生じている様子も窺われる。

2. 課題

(1) 他校との連携と調整時期及び受け入れ先の確保

今年度も9月に実習を行う3校で実習先の調整を行ったが、県外に進学している実習生の受け入れや行事との重なり、指導できる教員の不足、在園児の少なさ、こども園への移行途中による多忙などを理由に断られるケースも少なくなかった。また、これまで同様、砺波や立山町の幼稚園数や受入数がそれらの地域に居住する学生数と比較して少なく、今年度は砺波市の学生の3名を高岡市内の園に、立山町の学生2名を富山市内の園に配属することとなった。今後は、保育所から移行こども園を含めて受け入れ可能な実習先の開拓などを検討する必要がある。

(2) 実習の実施期間と学生の意欲

9月は運動会を行う園が多く、多忙な状況での実習生の受け入れは、部分や全日実習を実施する時間の確保が難しい反面、行事運営や準備、練習を体験できることの良さがあるだろう。2年生の夏休み中という、就職試験に備える学生もいる時期に、学生の意欲を高める指導を一層熱心に行っていく必要がある。

(3) 幼稚園への就職と実習学生の受け入れ

今年度も、各園への実習依頼の際に、2年生の9月という時期に実習を受け入れた段階で、すでに保育園やこども園への就職を決めている学生が多いという意見が聞かれた。今

後は、就職先が決まった学生であっても、意欲的に実習に取り組むように、さらに学生への指導を行うことが必要であろう。

3. アクションプランとの関連

【指針Ⅰ：教育】 1－(3)－② 「実習指導の体制を点検・強化」

学科教員間や実習受け入れ先との連携をより一層強化し、学外実習の有り方を検討する。

1. 現状

2年次の通年科目（実習・1単位）として実施。授業の第1回から4回の4コマ分は、附属みどり野幼稚園にて、「入園準備1日実習」として実施。園児は春休み中の為、登園していないが、幼稚園の各クラス担任の指示のもと、新クラスの受け入れ準備や、園庭の環境整備などを行う、毎年恒例の貴重な機会となっている。

本来は「教育実習ⅠおよびⅡの事前・事後指導」の授業であるが、平成24年度より6月の保育実習Ⅱ・Ⅲを控えた前期については、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」と連動して、実習日誌と指導案の書き方について多くの時間を充てている。

指導案については、保育者の配慮点についてのイメージを高められるよう、作って遊べる手作りおもちゃ製作を「造形表現Ⅱ」で行い、学生が自分の作品を手にした状態で、「教育実習指導」の時間内に、作成に取り組んだ。また、集団遊びを想定した指導案作成にも取り組んだ。これらの取り組みによって、学生が苦手とする「ねらい」と「内容」のとらえ方や、「予想される子どもの活動」に対する保育者の援助や配慮について何をどのように記入していけばよいか、イメージしやすくなったものと思われる。

後期は、教育実習Ⅱの振り返りを目的とし、「実習の中でうまくいったと思うこと、良かったと思うこと、うまくいかなかったこと」について、エピソード形式で詳細に記述した。各自のエピソードをグループごとに発表し合い、良かったものを2つ選び、全体で発表を行った。授業アンケートには、「他の人の実習体験を聴くことが出来たためになった」という学生の意見もあり、体験を分かち合うことの意義が感じられた。

2. 課題

指導案の活動内容やねらいの具体化

指導案については、少しでも学生がイメージしやすいよう、わかりやすいテキストを活用したり、造形表現の授業とつなげたりと工夫はしているものの、各々の学生が配属された実習先の担当クラスの年齢や子どもの実態に合わせた活動内容、それに対する「ねらい」の具体化が、まだまだ難しいようである。

3. アクションプランとの関連

【指針Ⅰ. 教育】1-（4）-④ ラーニングスタジオを利用した社会活動を検討

後期の実習の振り返りにおいて、通常授業時にはE703,704教室と5階HR教室を利用して、グループ討議やロールプレイを実施した。このロールプレイについては、1年生「保育の心理学Ⅱ」と2年生「保育者論」との合同授業として、小芝名誉教授を招き、2年生がロールプレイ（役割演技）の発表を行い、1年生は発表を見学する機会とした。この際、会場は舞台があるラーニングスタジオを利用し、2学年合同授業の会場として適切であり、活用することができた。

1. 現状

(1) 富山県保育実習連絡協議会の開催及び報告

平成 31 年 1 月 10 日（木）9 時 30 分から 11 時 30 分、事務担当校の富山大学五福キャンパス人間発達科学部第 1 校舎において、県内保育士養成校 6 校が会し、平成 31 年度実習日程の調整及び保育士養成に関わる現状と課題等について協議した。

その他の協議事項として、実習校との連携、実習に関わる書類、協議会の開催時期、学生の実習先への礼状、実習委託費などについて情報共有と意見交換が行われた。また、実習日誌のフォーマットが各養成校で統一されていない点について、実習先から指摘があるということが協議事項として出され、検討の結果、今年度は各校の実習日誌のフォーマット（教育実習、保育実習、施設実習）を共有し、参考にすることになった。

(2) 実習時間の取扱いについて

昨年度、指定養成施設の所管庁である富山県厚生部子ども支援課より、実習時間 90 時間における 1 時間は 45 分で換算できること、「単位数 2」「おおむねの実習日数 10 日」が満たされておれば問題がないとの確認を得ている。しかし、実習受け入れにあたり、実習施設からいまだにこの時間についての問い合わせが見られるため、実習先への周知はまだ足りないようである。

2. 課題

(1) 教育実習先の確保について

教育実習Ⅱの実習先の確保について、県外学生も含めて 3 校同時に 130 名以上の学生が県内で実習を行う期間がある。今後も園の減少が続く場合は、時期の変更も視野に入れて、再度検討することが問われている。

(2) 公立の実習委託費について

現在、富山市、黒部市、南砺市の公立保育所・幼稚園は、実習委託費だけでなく菓子折りも受け取らないようになっている。今後、他の市町村でも同様の変更がなされることが予想されるため、それぞれに合った対応をしていくことが必要である。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針 1：教育】1-(3)-① 富山県保育実習連絡協議会に参加し、実習等について現場の代表者と意見交換し、連携を深めた。

1. 現状

(1) 事前・事後指導

1年生にとって保育や施設の理解を深める体験学習であり、夏期休業期間を有意義に過ごすための貴重な機会として、自主実習参加を強く奨励した。実習日数の減少に歯止めがかかり、約6割の学生が4～5日間の実習に取り組んだ。学生自身が実習希望先に連電話での内諾を得た後、7月下旬までに書類提出と細菌検査申込を行った。実習中はトラブルもなく、報告書の提出状況は良好であった。1年生は実習先として1年後期・保育実習I-1と同じ施設を選んだ学生が14名、一人で2カ所の施設で実習した学生は5名であった。2年生は16名が就職先の候補として自主実習に参加し、内5名が自主実習先での就職を希望し内定を得た。

(2) 実習状況

		1年			2年			計	
		今年	参加率	昨年度	今年	参加率	昨年度	今年度	昨年度
在籍数		88		82	81		86	169	168
実習者数		83	94.3%	73	16	19.8%	27	99	100
実習件数	公立	保育所	30	26	1	1	31	27	
		こども園	0	0	0	1	0	1	
		幼稚園	0	1	0	0	0	1	
		施設	1	0	0	0	1	0	
	私立	保育所	20	22	8	13	28	35	
		こども園	29	26	7	13	29	39	
		幼稚園	2	0	0	0	2	0	
		施設	6	2	0	0	6	2	
	計		88	77	16	28	104	105	

2. 課題

(1) 手続期間

今年度は実習の内諾を電話で得た時点で届出用紙を提出し、内諾書の提出締め切り日を昨年度より約2週間遅らせた。余裕をもたせ、空き時間を活用して実習先訪問できるようにしたことで、1年生の参加率は上がった。しかし、2年生は参加者が減少した。今年度の2年生は、公務員採用試験の実施が早まっている（富山市以外は6～7月に筆記試験実施）ため、民間施設への就職活動開始が遅れ気味であった。2年生の自主実習は就職説明会や採用試験時期の変化に合わせて取り組む必要がある。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針1：教育】2-(5)-①

授業外学習時間を増やすため、自主実習参加率を高め、実習期間を延ばすため実施期間確保や書類提出期間の延長とオリエンテーションの充実に努めた。

1. 現状

(1) 各研究分野への配属と研究・調査の実態

9つの研究分野を設定し、10名の専任教員が担当した。各教員の担当学生数を8名とし、班編成は全体で23班となった。今年度は、新たな研究分野「子どもの保健」を設置し、「国語表現」を廃止、「外国の児童文化」を「世界の児童文化」に名称変更した。

(2) 中間発表会

大学祭の学科企画としての中間発表会では、各班がポスターで調査研究の全体像を効果的に表す工夫を重ね、収集した情報を整理することで研究の今後の見通しを立てることができた。来場者にはアンケートを実施、1年生には中間発表の感想レポート提出を課し、次年度の総合演習に向けての動機づけとした。

(3) 『総合演習第42集』について

記録集の書式は、昨年度と同様、二段組み、ページ数は4頁とした。記録集の学外施設への事前配布については、県内保育士養成校、幼児教育研究会後援団体、県厚生部、県経営管理部文書学術課に送付した。

(4) 成績評価基準の見直し

従来「研究レポート」60%、「発表会の内容」20%、「授業への参加」20%で成績評価を行ってきたが、「中間発表」や日頃の「研究への取り組み」をより重視するなど評価基準の見直しを行った。その結果、次年度からは「研究レポート」30%、「発表会の内容」15%、「中間発表」15%、「研究への取り組み」40%で成績評価を行うことになった。

(5) 総合演習発表会

A, B両会場で、すべての分野の研究発表が行われるようにプログラムを構成した。例年通り、発表会当日の運営は、学生運営スタッフが中心となって行った。

今年度は、発表後の質疑応答の活性化を図るために、事前に記録集に目を通し、発表会当日は、原則として発表が終わった班が次の班に質問あるいはコメントをするように指導した。その結果、昨年度に比べて、より多くの学生が発言するようになった。

今年度も、園舎の引っ越しが子どもに及ぼす影響、乳児保育における担当制、子どもの健康観察に関する父母の差、保護者の児童虐待への理解、児童養護施設で働く保育者の専門性など、地域に関するテーマの研究が見られた。

2. 課題

(1) 地域をテーマとする研究

富山県内の保育現場の様々な取り組みや歴史についての研究の指導を一層充実させる。

(2) 発表会の充実

発表会への積極的な参加を促すために、事前に記録集に目を通す、質疑応答で発言する機会を設けるなど、研究への興味関心を高める機会を設ける工夫をしていきたい。

3. アクションプランとの関連

【指針3：地域貢献】3-(8)-①地域志向カリキュラムの充実

「1. 現状 (4)」で述べた通り、県内保育現場の取り組みについてのテーマを採り上げた。

I - 4 保育・教職実践演習 担当 [梅本・高木・山川・明柴]

1. 現状

(1) 授業の概要

保育士・幼稚園教諭に必要な「4つの資質能力」(①使命感・責任感・教育的愛情と感性 ② 社会性・対人関係能力 ③ 乳幼児理解やクラス経営 ④ 保育内容の指導力)について理解するとともに、自らの修得状況を把握し自己課題を見出すことが到達目標である。昨年度と同様、実践活動に重点をおき、外部講師の講義を受けたグループ演習と合わせて、「4つの資質能力」の修得と自己課題解決の方法の検討を促した。

(2) 授業の進め方

「幼児理解と保育内容の指導力」「他者との連携・協力」をテーマとして(上記②③④)みどり野幼稚園の園児と保護者を対象に、放課後「遊びの広場」の実践活動を計画し、実施した。今年度は4グループ編成で、1グループの人数を減らすことで個々の主体的な取り組みを促した。遊びのテーマと内容を決め、幼稚園への参加案内、指導案の作成、遊びの準備と環境構成、遊びの運営等役割を分担しながら学生自らが行った。実際に園児と保護者を対象として実践活動を行うことで、実践力の修得と自己課題の把握につながった。また、「使命感・責任感・教育的愛情と感性」をテーマに、小学校校長先生の講話を受けて、グループ討議と発表を行い、内容的に理解を深めた。

(3) 履修カルテの活用

実践活動の振り返り、グループ討議後のレポート作成時など、適宜履修カルテの内容を参照し、自己課題を把握し解決の方法を検討できるようにした。

2. 課題

(1) 学生の学びの内容的充実について

「遊びの広場」実践活動は、4グループで取り組んだ。役割分担と各パートの作業は順調に進められたものの、それらをまとめて一つの取り組みにすることに課題がある。役割分担から協働への過程で必要とされる社会性・対人関係能力の修得を意識して、課題設定と指導を行っていきたい。実践活動の振り返りやグループ討議・発表を通して、「4つの資質能力」の理解は徐々に得られているものの、自己課題の具体的な把握と改善の方法の検討は十分とは言えない。この点においても、指導内容や方法の検討が必要である。

(2) 評価方法や観点について

これまでの学びをまとめ、保育者としての成長を確認する科目であるという性質上、細やかな観点による評価を行いたいところだが、評価の観点等、具体的な検討を行うことができなかった。引き続き次年度の検討課題としたい。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針 1: 教育】1-(3)-④ 保育・教職実践演習の授業の一環として、みどり野幼稚園の子どもと保護者を対象に「遊びの広場」の実践活動を行った。

1. 現状

(1) 休学、退学、復学について

休学 1年生 1名 (2018年4月入学 9月より1年間休学 一身上の都合)

退学 1年生 1名 (2018年4月入学 2019年2月退学 進路変更)

(2) 学業面での指導

1年生：受講態度において特別に問題がある学生はいなかった。

2年生：前期において一部の学生が非常勤講師から授業態度について注意されたにもかかわらず改善がみられなかった。その後、専任教員が指導を行い改善された。後期の幼稚園実習の終了後、就職活動が一段落した中盤から後半にかけての受講態度は昨年よりは改善されたが、まだ一部の学生に受講態度の乱れがみられた。

(3) 生活面での指導

健康に不安を抱える学生については、実習指導や授業において教科担当と対応について個別に指導を行った。実習中の悩みをきっかけに学校に来られなくなった学生については、担任、副担任、学科長、保護者を交えた面談をおこない付属幼稚園、保健室とも連携をとりながら対応したが復学には至らなかった。人間関係における不安を抱える学生については、担任やスクールカウンセラー、看護師と面談を行い学科で情報共有して対応した。クラス内での対人関係がうまくいかず休憩時間の過ごし方などに不安を抱える学生が多くなる傾向があり、学科教員で情報共有し対応している。

2. 課題

(1) 学生指導の在り方

集団になじめない学生については各教科担当や担任が指導を行っているが、学生に応じたより丁寧な指導が求められる。学校生活や、健康面での問題を抱えている学生について定期科内会議において情報を共有しているが、今後さらにそのような学生に対しては科内で連携して指導に当たることが必要である。

(2) 学生への情報提供

授業や実習、行事などの情報提供は、掲示板や携帯電話でのメールなどで発信してできるだけ早い対応を心がけているが、早朝に通学する学生には届いていない状況がある。特に急な時間割変更については学校として学生への情報提供が徹底できるような発信の方法と、受け手となる学生の意識を指導する必要がある。HPのブログへの掲載は早い時点で行えるため今後は学生への周知とブログへの掲載を徹底していきたい。

3. アクションプランとの関連

(1) 【指針Ⅱ：学生支援】2-(6)-① 学業不振の学生、人間関係や健康面で問題を抱えている学生について、定期科内会議で情報を共有して対応している。

Ⅱ－２ 進路支援

担当 [山川・中山・大森]

1. 現状

(1) 指導の進め方

担任・副担任を中心に、学科教員、就職支援センターの協力を得ながら、年間指導計画に基づいて行った。1年次は、2月に就職支援センターによる進路ガイダンス、3月には、外部業者による就職試験教養科目対策講座を実施した。2年次は、「進路指導・ホームルーム」(前・後期)を時間割に組み込み、系統的に指導をした。履歴書作成指導、専門科目特別講座、保育士就職模擬試験、先輩と語る会、模擬面接、小論文・作文指導等を実施した。「ハローワーク富山」職員による模擬面接を踏まえ、個々の学生の応募先に合わせて学科教員が個別に面接指導を行った。作文指導は、2年担任・副担任と学科長が担当した。また、福祉職場合同説明会への参加及び自主実習を奨励し、応募先を決めていくよう指導した。

(2) 求人及び進路内定状況

前年度同様、早期より求人依頼があり、年間を通して絶えることが無かった。今年度の保育士関連求人件数は、県内は170件、県外は180件で、前年度比は県内10%増、県外5%増であった。求人のほとんどが、私立保育園・こども園である。私立の施設(主に保育園)の採用試験は、公務員(市町村保育士)採用試験との併願が可能であるケースが多く、学生は機会を逃すことなく応募し、早い時期に就職先を確保することができた。公務員採用試験は、延べ53名が受験し、18名が合格した。

(3) 公務員試験対策

①教養科目対策講座を受ける ②自分の就職したい市町村を決める(可能ならば複数) ③勉強スタイルの確立と参考書・問題集の選定を早い時期から行うよう指導した。1次試験合格後は、エントリーシートの作成を担当・副担任と学科長で行った。エントリーシートの内容が面接につながることを意識して、話し合いながら丁寧に作成指導を行った。面接練習は担任・副担任・学科長がまず行ったうえでさらに複数の教員から受けられるようにするが、個々の学生の状態に合わせて臨機応変に対応した。

2. 課題

(1) 求人への対応

保育者確保のため、本年度も求人活動が活発に行われた。求人条件は多様であり、学生の受験先にかなりばらつきが見られた。県内のすべての園と良い関係を保つためにも、学生に対する求人情報提供を徹底させると同時に、必要に応じて求人先に対して連絡を取り、希望者の有無や地域別の内定状況をすみやかに報告するなど、誠意ある対応が必要である。また、求人数が過多であるため、学生自身での受験先の選択が難しい面もあり、学生自身が納得できる選択を援助していくことも、これまで以上に必要である。

(2) 公務員採用試験対策

今年度は52名の学生が教養科目対策講座を受講したが、この中には公務員採用試験合格者18名中17名が含まれている。また、保育士就職模擬試験は35名が受験、そのうち14名が公務員採用試験に合格している。公務員保育士を目指す学生には、必ずこのような講座や模擬試験を受けるよう指導することが望ましい。

(3) 内定後の学生指導

就職内定者に対しては、就職先が決まっても気を抜かず、その後の授業、実習、卒業研究などに真摯に取り組むよう指導してきたので、昨年同様、気のゆるみはそれほど見られなかった。今後も、学生が「管理されている」と感じたり、自主性を失わせることがない程度に、学生が内定後を有意義に過ごせるよう、適切な指導を行うことが必要である。

(4) 専門職への就職率

今年度は、専門職への就職率が5年ぶりに100%となった。進路指導等をとおして、専門職への意識を高める支援が功を奏したと思われる。今後も同様の取り組みが必要である。また、今年度は、こども園への移行により減少している幼稚園への就職が0名となった。

3. アクションプランとの関連

【指針Ⅰ：教育】

1-(3)-1 ワークルール講座を実施し、実践的な社会力を身につけた。

【指針Ⅱ：学生支援】

1-(1)-① 就職先訪問を継続して実施した。その際に得た情報を就職指導に活かしていくことが必要である。

富山短期大学幼児教育学科5年間の就職状況

卒業年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	
就職希望者／卒業生	85 / 88	83 / 83	104 / 106	85 / 86	80 / 81	
専門職	幼稚園	12	4	6	4	0
	保育所	67	56	64	59	51
	幼保連携型 認定こども 園	—	20	19	15	24
	福祉施設等	4	2	9	5	5
	小計	83	82	98	83	80
	専門職就職率	96.5%	99%	92.5%	96.5%	100%
	専門職関連	0	0	0	0	0
一般職	3	1	5	2	0	
進学	1	0	1	1	0	
家事	1	0	2	0	1	
総計	88	83	106	86	81	

Ⅲ-1 ボランティア・地域活動

担当 [山川]

1. 現状

(1) ボランティア手帳における幼児教育学科学生参加状況

ボランティア参加数

2019.2/28 現在 () は平成 29 年度数

学年	全学生数	参加率	参加人数	延人数	レポート数
1 年	86 (81)	86.0% (75.3)	74 (61)	164 (80)	2.2 (1.3)
2 年	81 (86)	30.9% (30.2)	25 (26)	46 (33)	1.8 (1.3)
全学科学生	658 (658)	48.9% (52.7)	325 (332)	728 (694)	2.2 (2.1)

月別参加人数

2019. 2/28 現在

学年	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月
1 年	8	5	6	39	20	38	8	4	4	14	18
2 年	13	0	1	0	18	0	7	3	1	0	3
計	21	5	7	39	38	38	15	7	5	14	21

今年度も、例年通り、7月から10月にかけて行われる、付属みどり野幼稚園主催の行事への1年生の参加者が多かった。また、ボランティア活動の回数を重ねる学生は例年少なく、0名という月もあるが、今年度は1年生に大変多く活動に参加する学生が1名おり、1年生は参加人数が0名の月がなかった。全学のボランティア活動賞は、前述の1年生1名と2年生1名が受賞した。

(2) イベント参加

学科主催の地域活動として、2月にアイザック小杉文化ホールで、「こどものための音楽会（器楽合奏、オペレッタ）」を行った。

また、学科に直接依頼された以下の様々な活動に多数の学生が参加した。

- ・7月 絵本ランド出演 2018（遊びうた、読み聞かせなど） ファボーレ富山店
- ・10月 学園祭 in 南砺（運営補助、大型絵本、手遊び） 南砺サテライト
- ・2月 うれしい1年生のつどい（オペレッタ） 富山県民会館
- ・3月 新入園児のつどい（手遊び、遊び歌等） 富山県教育文化会館

2. 課題

(1) 活動参加推進

本学では、特別に学科に対してボランティアの参加依頼が来る場合以外は、「Web ボランティア手帳」でボランティアの募集が行われている。しかし、本学科の学生については、「Web ボランティア手帳」のログインから躓くこともしばしば聞かれる。現在、入学時に行われているシステムや利用方法の説明の、さらなる充実が必要であろう。また、「Web ボランティア手帳」を通じ、ボランティアに参加しても、最後のレポートが未入力になる学生が多い。レポート未入力ではポイントにならないため、学生の動機づけをさらに行う必要がある。

(2) 地域活動の充実と拡大

授業の一環として、教員も関わり、地域に働きかける自主的な活動に取り組むことで、学生は日ごろの学びを活かし、地域活動に参加することが可能になっている。このような取り組みを重ねることで、学生の地域活動が充実し、広がり、学生自らが積極的に取り組む姿勢が作られることが期待される。

3. アクションプランとの関連

【指針 3：地域貢献】 1－(2)－② ボランティア手帳のシステムのオリエンテーションを改善した。

Ⅲ-2 幼児教育センター活動 担当 [石動・梅本・大森・明柴]

1. 現状

(1) 研究及び広報部門

①第46回幼児教育研究会の開催

富山県ひとつくり財団の助成を受けて、下記のとおり実施した。

日時：平成30年6月2日(土)9:30-16:00 共催：富山国際大学子ども育成学部

主題：乳幼児期に育みたい力と保育者の役割

ワークショップ「遊びとコミュニケーション～あなたがわたしをつくっている、
わたしがあなたをつくっている～」 ストウミキコ・中西昌大

講演「乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達」

遠藤 利彦（東京大学大学院教授）

参加者：208名(内訳：一般120名、本学科学生(2年生)77名、教職員11名)

②機関誌「越の子」の発行

No.76号 2018.5.15発行(A4版 6ページ) 1,100部

[内容]学科長就任、退任挨拶。新任教員教育歴紹介など

No.77号 2018.11.1発行(A4版 24ページ) 1,200部

[内容]第46回幼児教育研究会記録集、幼児教育学科学生の学び(2p)新規追加

(2) 研究活動の把握と資料収集部門

幼児教育センターの予算で購入した図書資料及び設置場所は次のとおりである。

- ①日本保育学会論文集(E-206 学科事務室)
- ②美育文化ポケット(5階ラウンジ)
- ③チャイルドヘルス(5階ラウンジ)
- ④プリプリ(5階ラウンジ)
- ⑤あそびと環境0・1・2歳(5階ラウンジ)
- ⑥新幼児と保育(5階ラウンジ)

2. 課題

指針等の改定や第44,45回の研究会の内容等を意識した研究テーマ・内容であり、多くの参加者の関心に応えるものとなった(アンケート回答者の95%が「満足」以上で回答、講演では53%が「大変満足」と回答)。県内各団体が数多くの講演会を開催している中で、幼児教育センターとしての特色を発揮することが大切であると思われる。保育現場の現状を見据えつつ、先進的な学びの場を提供できるよう、次年度以降のテーマ・内容の充実に努めたい。また、センターでの取組みが県内の保育の質向上に資するよう、機関紙「越の子」における発信内容の検討が必要である。

3. アクションプランとの関連

【指針3：地域貢献】1-(2)-① 【指針1：教育】3-(9)-①

幼児教育研究会の内容のさらなる充実を図る。機関紙「越の子」の充実を図る。